

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平3-6753

(43) 公開日 平成 3 年(1991) 1 月14日

(51) Int. Cl. <sup>5</sup> 識別記号 F I  
G 0 6 F 12/00 3 0 2

審査請求 有 請求項の数 1 (全 9 頁) (11)

(21) 出願番号 特願平1-142425  
(22) 出願日 平成 1 年(1989) 6 月5日

(71) 出願人 000000423  
日本電気株式会社  
東 京  
(72) 発明者 西村 孝幸  
\*

(54) 【発明の名称】ファイル退避方式

(57) y v æ  
y I z t @ C " L 景  
% t @ C . e 6  
B fi  
i ° z t @ C K 0  
, ~ S < † 電  
- E A t @ C f [ ^ 0  
L i 8  
Y ~ a p " z d q 8  
e a fl Ø t @ C

‘

“ ” e L X

 $\dot{z}$ 
$$e \in L \times X$$

} ° " 2

$$\} \quad \circ \quad \cdot \quad p \quad \cdot \quad e \quad L$$

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

## ⑫ 公開特許公報(A) 平3-6753

⑬ Int. Cl.<sup>5</sup>

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成3年(1991)1月14日

G 06 F 12/00

3 0 2 L

8944-5B

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全9頁)

⑮ 発明の名称 ファイル退避方式

⑯ 特 願 平1-142425

⑰ 出 願 平1(1989)6月5日

⑱ 発 明 者 西 村 孝 幸 東京都港区芝5丁目33番1号 日本電気株式会社内

⑲ 出 願 人 日本電気株式会社 東京都港区芝5丁目7番1号

⑳ 代 理 人 弁理士 境 廣 巳

## 明 細 書

## 1. 発明の名称

ファイル退避方式

## 2. 特許請求の範囲

データファイル装置に格納されたファイルを格納ファイル装置に全退避し、その後、更新のあったファイルにつき更新退避を行うファイル退避方式において、

データファイル装置からファイル管理情報を退避ファイルテーブルに読み込み、全退避時には格納ファイル装置に格納ファイルを確認した後、更新退避時には退避ファイル判定手段を呼び出して実行させた後、退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報を格納ファイルに退避し、退避したファイル管理情報の位置情報を格納ファイルテーブルに登録するファイル管理情報退避手段と、

ファイル管理情報退避手段により呼び出され、読み込んだファイル管理情報に保持されているファイル更新日時と格納ファイルテーブルに保持さ

れている格納ファイルの作成日時とを比較することにより前回の退避以降にファイルが更新されたか否かの判定を行い、退避すべきファイルのファイル管理情報を退避ファイルテーブルに残す退避ファイル判定手段と、

退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報と格納ファイルテーブルに保持されている退避されたファイルの格納ファイル内での位置情報とを参照し、データファイル装置から格納ファイル装置の格納ファイルへ退避すべきファイルのファイルデータを置換あるいは追加して退避するファイルデータ退避手段とを備えたことを特徴とするファイル退避方式。

## 3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は電子計算機を利用した情報処理システムにおけるファイル退避方式に関し、特に全てのファイルの退避を一度行った後は更新のあったファイルのみを退避するファイル退避方式に関するものである。

## 特開平 3-6753 (2)

〔従来の技術〕

電子計算機を利用した情報処理システムにおいては、障害に対する利用者ファイルのバックアップのために、ファイルを格納したデータファイル装置とは別の格納ファイル装置に所定の時期にファイルを退避するようにしている。また、この種のファイル退避方式では、データファイル装置に格納されたファイルの全てを格納ファイル装置にいったん退避（全退避）し、その後、更新のあったファイルについてのみ退避（更新退避）を行う方式をとっている。

更に、従来のファイル退避方式では、全退避および更新退避において、ファイルを退避する格納ファイルを別々に確保して退避を行っており、退避を行う度に格納ファイルを確保し、退避を行っていた。

〔発明が解決しようとする課題〕

上述したように、従来のファイル退避方式ではファイルを退避する格納ファイルを別々に確保して退避を行っていたため、次のような欠点があっ

た。

- ①更新退避毎に新たに格納ファイルを用意しなければならず、その都度ファイル資源が必要となる。
- ②更新退避されるファイルの内容は、全退避時の格納ファイルや以前の更新退避で退避された格納ファイルの内容と大部分重複しており、同様なイメージを持つファイルが存在しているため、無駄にファイル資源を使用している。
- ③格納ファイルが複数となるため、その管理が複雑になる。

本発明は上記の点に鑑み提案されたものであり、その目的とするところは、ファイル資源の有効利用が図れると共に、退避したファイルの管理を容易に行うことのできるファイル退避方式を提供することにある。

〔課題を解決するための手段〕

本発明は上記の目的を達成するため、データファイル装置に格納されたファイルを格納ファイル装置に全退避し、その後、更新のあったファイル

につき更新退避を行うファイル退避方式において、

データファイル装置からファイル管理情報を退避ファイルテーブルに読み込み、全退避時には格納ファイル装置に格納ファイルを確保した後、更新退避時には退避ファイル判定手段を呼び出して実行させた後、退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報を格納ファイルに退避し、退避したファイル管理情報の位置情報を格納ファイルテーブルに登録するファイル管理情報退避手段と、

ファイル管理情報退避手段により呼び出され、読み込んだファイル管理情報に保持されているファイル更新日時と格納ファイルテーブルに保持されている格納ファイルの作成日時とを比較することにより前回の退避以降にファイルが更新されたか否かの判定を行い、退避すべきファイルのファイル管理情報を退避ファイルテーブルに残す退避ファイル判定手段と、

退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報と格納ファイルテーブルに保持されている

退避されたファイルの格納ファイル内での位置情報とを参照し、データファイル装置から格納ファイル装置の格納ファイルへ退避すべきファイルのファイルデータを置換あるいは追加して退避するファイルデータ退避手段とを備えるようにしている。

〔作用〕

本発明のファイル退避方式にあっては、ファイル管理情報退避手段がデータファイル装置からファイル管理情報を退避ファイルテーブルに読み込み、全退避時には格納ファイル装置に格納ファイルを確保した後、更新退避時には退避ファイル判定手段を呼び出して実行させた後、退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報を格納ファイルに退避し、退避したファイル管理情報の位置情報を格納ファイルテーブルに登録し、

退避ファイル判定手段がファイル管理情報退避手段により呼び出されて動作を開始し、読み込んだファイル管理情報に保持されているファイル更新日時と格納ファイルテーブルに保持されている

## 特開平 3-6753 (3)

格納ファイルの作成日時とを比較することにより前回の退避以降にファイルが更新されたか否かの判定を行い、退避すべきファイルのファイル管理情報を退避ファイルテーブルに残し、

ファイルデータ退避手段が退避ファイルテーブルに登録されたファイル管理情報と格納ファイルテーブルに保持されている退避されたファイルの格納ファイル内での位置情報とを参照し、データファイル装置から格納ファイル装置の格納ファイルへ退避すべきファイルのファイルデータを置換あるいは追加して退避する。

(実施例)

以下、本発明の実施例につき図面を参照して説明する。

第1図は本発明のファイル退避方式の一実施例を示す構成図である。第1図において、データファイル装置1は利用者ファイルの格納される装置であり、利用者ファイルはファイル管理情報11および複数のファイルデータ12として格納されている。また、格納ファイル装置7はファイルを

み込んだファイル管理情報11に保持されているファイル更新日時と格納ファイルテーブル6に保持されている格納ファイル71の作成日時とを比較することにより前回の退避以降にファイルが更新されたか否かの判定を行い、退避すべきファイルのファイル管理情報を退避ファイルテーブル5に残す機能。

ファイルデータ退避手段4；退避ファイルテーブル5に登録されたファイル管理情報と格納ファイルテーブル6に保持されている退避されたファイルの格納ファイル71内での位置情報とを参照し、データファイル装置1から格納ファイル装置7の格納ファイル71へ退避すべきファイルのファイルデータ12を置換あるいは追加して退避する機能。

第2図は第1図におけるデータファイル装置1内のファイル管理情報11とファイルデータ12との関係を示した図である。すなわち、ファイル管理情報11内には利用者毎にファイルを管理するために複数の利用者識別子13が設けられ、こ

退避するための装置であり、内部に複数の格納ファイル71が形成されるものである。

一方、本実施例の機能部は、ファイル管理情報退避手段2と退避ファイル判定手段3とファイルデータ退避手段4とから構成され、退避ファイルテーブル5および格納ファイルテーブル6は上記の各手段の実行に必要な情報を保持するテーブルである。なお、各手段の機能は次の通りである。

ファイル管理情報退避手段2；データファイル装置1からファイル管理情報11を退避ファイルテーブル5に読み込み、全退避時には格納ファイル装置7に格納ファイル71を確保した後、更新退避時には退避ファイル判定手段3を呼び出して実行させた後、退避ファイルテーブル5に登録されたファイル管理情報を格納ファイル71に退避し、退避したファイル管理情報の位置情報を格納ファイルテーブル6に登録する機能。

退避ファイル判定手段3；ファイル管理情報退避手段2により呼び出されて動作し、ファイル管理情報退避手段2が退避ファイルテーブル5に読

みの利用者識別子13に複数のファイル記述子14が連なり、各ファイル記述子14が対応するファイルデータ12を指すようになっている。図では利用者識別子Aに3つの利用者ファイルが存在しそのファイル記述子F1、F2、F3がファイルデータD1、D2、D3を指している状態を示している。なお、ファイル記述子14には、ファイルの識別子であるファイル名15と、作成日時16と、更新日時17と、ファイル編成やファイルサイズ等を示すファイル属性18と、対応するファイルデータ12が格納されているデータファイル装置1上の位置情報を示すファイルデータアドレス19とが含まれている。

第3図は第1図における格納ファイル装置7上に確保される格納ファイル71および格納ファイルテーブル6上に登録される格納ファイルエントリ61のフォーマットを示した図である。すなわち、格納ファイル71はファイル記述情報部72とファイルデータ部73とを有し、ファイル記述情報部72にはデータファイル装置1のファイル

## 特開平3-6753(4)

管理情報11と同様な内容である、利用者識別子と退避されたファイルのファイル記述子とが退避順に格納されるようになっている。また、ファイルデータ部73には、退避された各ファイルに対応してファイルヘッダ74とファイルデータ75とが設けられ、退避されたファイルのファイルデータ12がファイルデータ75に格納されるようになっている。なお、ファイルヘッダ74は、ファイル名76と、ファイルデータ75の格納ファイル71内での相対位置を示すファイルデータアドレス77とを含んでいる。

一方、第3図において、格納ファイルエントリ61は、先頭部分に利用者識別子と、格納ファイル71の作成日時63と、格納ファイル71の格納ファイル装置7上での位置情報を示す格納ファイルアドレス64とを有し、その後ろに各ファイルデータ12に対応する退避ファイルエントリ62が設けられている。なお、退避ファイルエントリ62は、ファイル名65と、格納ファイル71内のファイル記述子の位置を示すファイル記述子

アドレス66と、ファイルヘッダ74の位置を示すファイルヘッダアドレス67とを有している。例えば、第3図では、ファイル名aの退避ファイルエントリ62内のファイル記述子アドレス66はファイル記述情報部72内に格納されているファイル記述子F1の位置を指し、ファイルヘッダアドレス67はファイルデータ部73内のファイルヘッダDH1の位置を指している。

次に、上記の実施例の動作につき、第4図のフローチャートを参照しながら説明する。

本発明のファイル退避方式では、先ずファイル管理情報11の利用者識別子13に連なるファイル記述子14の指すファイルデータ12の全てを退避する全退避を行い、その後、前回の退避以降でファイルの更新が行われたファイルだけを退避する更新退避を繰り返す。そこで、更新退避に先立って行われる全退避について最初に説明する。なお、一例として、利用者識別子Aの配下にファイル名a、b、cを持つファイル記述子F1、F2、F3が存在し、それによって指されるファ

イルデータD1、D2、D3を退避する場合を想定する。

先ず、ファイル管理情報退避手段2は、データファイル装置1からファイル管理情報1を読み込み、利用者識別子13(A)に連なる複数のファイル記述子14(F1、F2、F3)を退避ファイルテーブル5に読み込む(ステップ201)。

次いで、全退避か否かの判断を行うが(ステップ202)、今は全退避であるためyesの側に進む。

そして、読み込んだファイル記述子14(F1、F2、F3)のファイル属性18を参照し、ファイルデータ12(D1、D2、D3)の全容量を求め、退避に必要な格納ファイル71のサイズを把握し、格納ファイル装置7上に格納ファイル71を確保すると共に、格納ファイルテーブル5上に格納ファイルエントリ61を作成し、利用者識別子13(A)と作成日時63と格納ファイルアドレス64とを登録する(ステップ203)。

次いで、全てのファイル記述子について処理が

終了したか否かの判断を行うが(ステップ204)まだ処理を始めたばかりなので当然にnoの側へ進む。続いて、退避ファイルエントリ62が存在するか否かが判断されるが(ステップ205)、まだ全退避を行う前の状態なので当然にnoの側へ進む。

そして、退避ファイルテーブル5上のファイル記述子(F1)を既に確保した格納ファイル71のファイル記述情報部72に書き込み(ステップ206)、続いて格納ファイルエントリ61に今回退避するファイルのファイル名(a)に対する退避ファイルエントリ62を作成し、ファイル記述子(F1)を書き込んだ格納ファイル71上の位置情報をそのファイル記述子アドレス66として登録する(ステップ207)。

上記のステップ206、207の処理を退避ファイルテーブル5上に読み込んだ他のファイル記述子(F2、F3)に対しても繰り返し行うことにより、ファイル管理情報退避手段2は処理を終了する。

## 特開平 3-6753 (5)

以上の処理によってファイル管理情報退避手段 2 によるファイル管理情報 11 の全退避処理は終了し、格納ファイル 71 のファイル記述情報部 72 にファイル記述子 (F1, F2, F3) が退避され、格納ファイルエントリ 61 内に対応するファイル名 (a, b, c) の退避ファイルエントリ 62 が作成される。

次に、ファイルデータ退避手段 4 に制御が渡り、ファイルデータ 12 の退避処理が行われる。

まず、ファイルデータ退避手段 4 は全てのファイル記述子について処理が終了したか否かの判断を行うが (ステップ 401)、まだ処理を初めただけなので当然に n o の側へ進む。

そして、ファイルデータ退避手段 4 は退避ファイルテーブル 5 上の先頭のファイル記述子 14 (F1) のファイルデータアドレス 19 により退避すべきファイル (ファイル名 a) のファイルデータ 12 (D1) の格納位置を認識し、そのファイルデータ 12 (D1) を読み込む (ステップ 402)。

次いで、退避ファイルエントリ 62 のファイルヘッダアドレス 67 が存在するか否かを判断するが (ステップ 403)、まだファイルデータ部 73 の格納を行っていないため n o の側へ進む。

そして、ファイルデータ 12 (D1) が退避される格納ファイル 71 内での位置であるファイルデータアドレス 77 を算出し、ファイル名 76 (a) とそのファイルデータアドレス 77 とからファイルヘッダ 74 (DH1) を作成し (ステップ 404)、ファイルデータ 75 (D1) に付加してファイルデータ部 73 に書き込む (ステップ 405)。

続いて、格納ファイルエントリ 61 内のファイル名 a に対応する退避ファイルエントリ 62 のファイルヘッダアドレス 67 にファイルヘッダ 74 (DH1) を書き込んだ位置情報を入れる (ステップ 406)。

上記のステップ 404 ~ 406 の処理を退避ファイルテーブル 5 内の他のファイル記述子 14 (F2, F3) に対しても繰り返し行うことによ

り、ファイルデータ退避手段 4 は処理を終了する。

以上の処理により、ファイルデータ退避手段 4 によるファイルデータ 12 の全退避処理が終了し、格納ファイル 71 のファイルデータ部 73 にファイルデータ (D1, D2, D3) が各々ファイルヘッダ (DH1, DH2, DH3) を付加した形で退避され、格納ファイルエントリ 61 内の退避ファイルエントリ 62 のファイルヘッダアドレス 67 に各々のファイルヘッダ (DH1, DH2, DH3) を指し示す位置情報が入れられる。

次に、退避後に更新のあったファイルのみを退避する更新退避処理について説明する。なお、一例として、上述した例におけるファイルデータ D1, D2 に対して前回のファイル退避以降に更新があり、ファイル記述子 F1', F2' およびファイルデータ D1', D2' になったと想定する。

ファイル管理情報退避手段 2 は、全退避時と同様に利用者識別子 13 下の複数のファイル記述子 14 (F1', F2', F3) を退避ファイルテーブル 5 に読み込む (ステップ 201)。続いて、

全退避か否かが判断されるが (ステップ 202)、今度は更新退避であるため n o の側へ進み、退避ファイル判定手段 3 の処理に移行する。

退避ファイル判定手段 3 は全てのファイル記述子について処理が終了したか否かの判断を行うが (ステップ 301)、まだ処理を初めただけなので当然に n o の側へ進む。

そして、退避ファイルテーブル 5 上に読み込まれたファイル記述子 14 の更新日時 17 と、利用者識別子 13 (A) で識別される格納ファイルテーブル 5 内の格納ファイルエントリ 61 内の作成日時 63 とを比較し、前回のファイル退避以降にファイル更新が行われているか否かを判断する (ステップ 302, 303)。

ここで、更新が行われている場合は y e s の側に移行して再びステップ 301 に戻り、また、更新が行われていない場合は n o の側に移行してファイル記述子 14 を退避ファイルテーブル 5 上から削除し (ステップ 304)、更新があったファイルのファイル記述子 14 だけを退避ファイルテ

## 特開平 3-6753 (6)

ーブル 5 上に残す。今の例では更新の行われているファイルに対応するファイル記述子 F 1'、F 2' だけが退避ファイルテーブル 5 上に残される。

上記の処理を全てのファイル記述子 1 4 に対して行った後、ファイル管理情報退避手段 2 に制御を戻す。

ファイル管理情報退避手段 2 は全てのファイル記述子について処理が終了したか否かの判断を行うが (ステップ 2 0 4)、まだ処理を初めただけなので当然に n o の側へ進む。続いて、退避ファイルエントリ 6 2 が存在するか否かが判断されるが (ステップ 2 0 5)、今は更新退避であるためファイルが追加された場合を除いて退避ファイルエントリが既に存在するので y e s の側へ進む。

そして、退避ファイルテーブル 5 上に残っているファイル記述子 1 4 (F 1') を参照してファイル名 1 5 (a) を取得し、格納ファイルエントリ 6 1 の退避ファイルエントリ 6 2 からファイル記述子アドレス 6 6 を得て、退避ファイルテーブル 5 上に読み込んだファイル記述子 1 4 (F 1')

で格納ファイル 7 1 のファイル記述情報部 7 2 のファイル記述子 (F 1) と置換する (ステップ 2 0 8)。更に、他のファイル記述子 1 4 (F 2') に対しても同様の処理を繰り返す。

なお、この想定では該当しないが、退避ファイルエントリ 6 2 が存在しない場合は、ファイルが前回の退避以降に追加されたとみなし、全退避時と同様に格納ファイル 7 1 のファイル記述情報部 7 2 に退避ファイルテーブル 5 上のファイル記述子 1 4 を追加して書き込み (ステップ 2 0 6)、続いて退避ファイルエントリ 6 2 を作成して、ファイル記述子 1 4 を書き込んだ位置情報をファイル記述子アドレス 6 6 として登録する (ステップ 2 0 7)。

以上のように、退避ファイルテーブル 5 上に退避すべきものとして残されているファイル記述子 1 4 の全てを置換/追加した段階で、ファイル管理情報退避手段 2 によるファイル記述子 1 4 の更新退避処理は終了する。

次に、ファイルデータ退避手段 4 に制御が渡り、

ファイルデータ 1 2 の更新退避処理が行われる。

ファイルデータ退避手段 4 は全てのファイル記述子について処理が終了したか否かの判断を行うが (ステップ 4 0 1)、まだ処理を初めただけなので当然に n o の側へ進む。

そして、退避ファイルテーブル 5 上のファイル記述子 1 4 (F 1') を参照し、全退避と同様にファイルデータ 1 2 (D 1') を読み込む (ステップ 4 0 2)。

次いで、退避ファイルエントリ 6 2 のファイルヘッダアドレス 6 7 が存在するか否かを判断するが (ステップ 4 0 3)、今は更新退避であるためファイルが追加された場合を除いてファイルヘッダアドレス 6 7 が既に存在するので y e s の側へ進む。

そして、格納ファイルエントリ 6 1 を検索して同一ファイル名 (a) の退避ファイルエントリ 6 2 を見つけ、ファイルヘッダアドレス 6 7 を得て、格納ファイル 7 1 よりファイルヘッダ 7 4 (D H 1) を読み込む (ステップ 4 0 7)。

そして、読み込んだファイルヘッダ 7 4 (D H 1) 内のファイルデータアドレス 7 7 から格納されているファイルデータ 7 5 (D 1) のサイズを取得し、今回読み込んだファイルデータ 1 2 (D 1') のサイズと比較して拡張ファイルが必要であるか否かを判断する (ステップ 4 0 8)。そして、今回退避するファイルデータ 1 2 (D 1') の方が同じか小さい時は n o の側へ進み、読み込んだファイルデータ 1 2 (D 1') で格納ファイル 7 1 のファイルデータ部 7 3 内のファイルデータ 7 5 (D 1) を置換する (ステップ 4 0 9)。

一方、読み込んだファイルデータ 1 2 (例えば D 2') のサイズがファイルデータ部 7 3 に退避されているファイルデータ (D 2) より大きい場合は、ファイルデータ 1 2 (D 2') でファイルデータ 7 5 (D 2 a) をそのサイズ分だけ置換し、ファイルデータ (D 2') の拡張された部分は、ファイルデータ部 7 3 の最終ブロック以降へファイルデータ (D 2 b) として書き込んで行く (ステップ 4 1 0)。そして、最終ブロック以降に書



## 特開平 3-6753 (7)

き込んだファイルデータ (D 2 b) に対するファイルデータアドレス 7 7 をファイルヘッダ 7 4 (D 11 2) 内に追加する (ステップ 4 1 1)。

また、この想定では該当しないが、退避ファイルエントリ 6 2 内のファイルヘッダアドレス 6 7 が登録されていない時は、ファイルの追加とみなし、全退避と同様にファイルデータ 1 2 の追加処理 (ステップ 4 0 4 ~ 4 0 6) を行う。

ファイルデータ退避手段 4 は、上記処理を退避ファイルテーブル 5 内の全てのファイル記述子 1 4 に対して行い、これによりファイルデータ 1 2 の更新退避処理が終了する。

その後の更新後退避も同様に行われる。

〔発明の効果〕

以上説明したように、本発明のファイル退避方式にあっては、退避されたファイルの格納ファイル内での相対位置情報をテーブルに登録しておき、全退避以降の更新退避に際し、先に行った退避で格納ファイルに退避されているファイルデータを今回退避すべきファイルデータで置き換えること

により、全退避で作成した格納ファイルと更新退避で作成する格納ファイルとを結合した形で格納ファイルを作成するため、ファイル退避に必要な格納ファイルは各利用者に対して全退避時に作成された格納ファイルただ 1 つのみであり、ファイルデータの重複をなくしてファイル資源を有効に利用できると共に、格納ファイルの管理が容易になるという効果がある。

## 4. 図面の簡単な説明

第 1 図は本発明のファイル退避方式の一実施例を示す構成図、

第 2 図はファイル管理情報とファイルデータとの関係を示す図、

第 3 図は格納ファイルおよび格納ファイルエントリの詳細図および、

第 4 図は実施例の処理を示すフローチャートである。

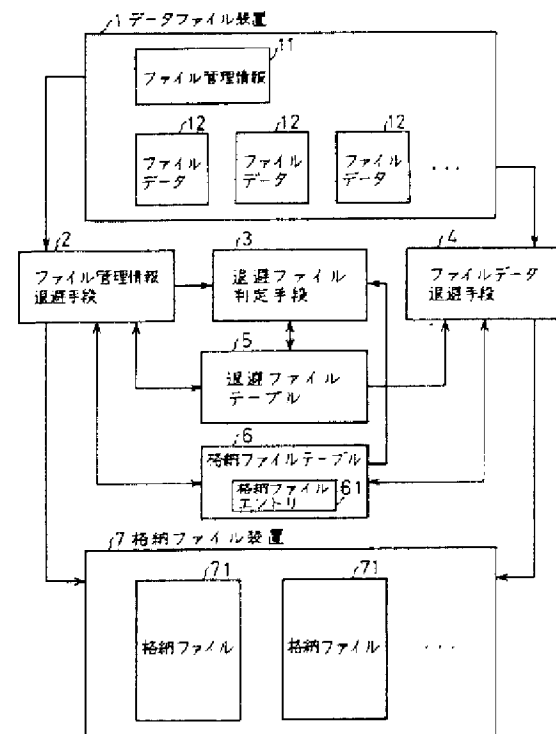
図において、

1 ……データファイル装置

1 1 ……ファイル管理情報

- 1 2 ……ファイルデータ
- 2 ……ファイル管理情報退避手段
- 3 ……退避ファイル判定手段
- 4 ……ファイルデータ退避手段
- 5 ……退避ファイルテーブル
- 6 ……格納ファイルテーブル
- 6 1 ……格納ファイルエントリ
- 7 ……格納ファイル装置
- 7 1 ……格納ファイル

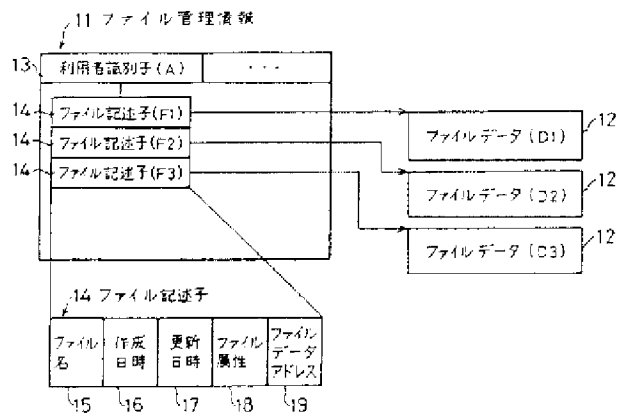
特許出願人 日本電気株式会社  
代理人 弁理士 境 廣 巳



実施例の構成図

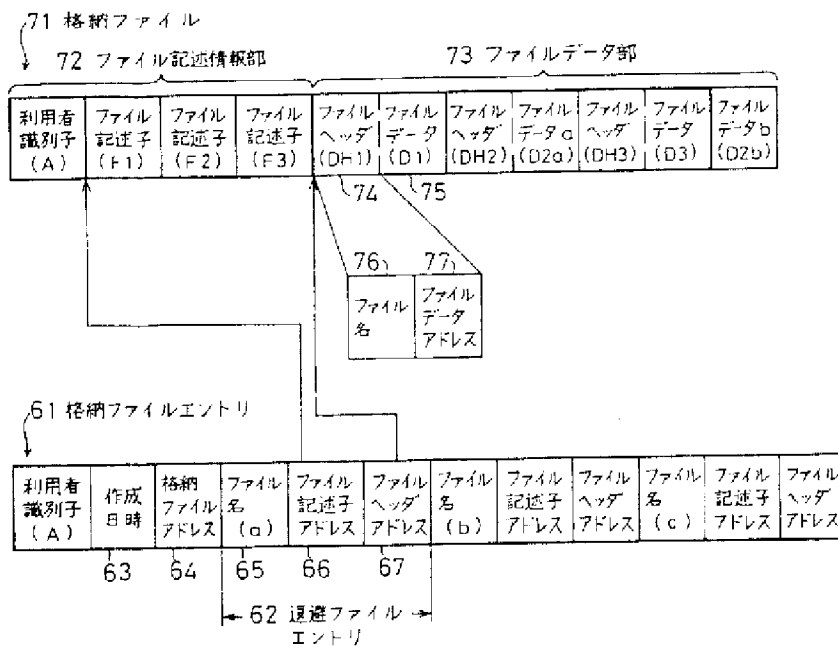
第 1 図

特開平 3-6753 (8)



ファイル管理情報とファイルデータとの関係を示す図

第 2 図



格納ファイルおよび格納ファイルエントリの詳細図

第 3 図

特開平 3-6753 (9)

